

中医国际教育教科書シリーズ

総編集・劉平

副総編集・張碧英

上海中医药大学国際教育学院総企画

中医基礎理論

編著・張碧英 張再良



上海科学技術出版社

中医国際教育教科書シリーズ

総編集 劉平

副総編集 張碧英

中医基礎理論

上海中医薬大学国際教育学院総企画

編著

張碧英 張再良

上海科学技術出版社

图书在版编目(CIP)数据

中医基础理论. 日文/上海中医药大学国际教育学院
编. —上海: 上海科学技术出版社, 2009. 8

(中医国际教育系列教材)

ISBN 978-7-5323-9817-1

I. 中… II. 上… III. 中医医学基础—教材—日文
IV. R22

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2009)第 054105 号

上海世纪出版股份有限公司 出版发行
上海科学技术出版社

(上海钦州南路 71 号 邮政编码 200235)

浙江印刷集团印刷 新华书店上海发行所经销

开本 787 × 1092 1/16

印张 15 字数 300 千

2009 年 8 月第 1 版 2009 年 8 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-5323-9817-1/R · 2668

定价: 100.00 元

本书如有欠页、错装或损坏等严重质量问题,
请向工厂联系调换

中医国際教育教科書シリーズ

総編集 劉 平 副総編集 張碧英

《中医基礎理論》

編著 張碧英 張再良

《中医診斷学》

編著 鉏桂祥 鐘祥華

《中藥学》

編著 張碧英 郭 忻

《方剂学》

編著 鉏桂祥 文小平

《中医内科学》

編著 朱根勝 鈴木康仁 村上梧庵

序

現在の世界医学システムを見ると、多くの国と地域では、西洋医学システムが主流となっており、同時に、全世界では、疾病の予防と治療をする為に、70%の人が、ある程度、伝統医学と言う手段を利用しています。

アジアの3大伝統医学システムとして、中国伝統医学は、そのうちの最大のものであり、それは深遠な中華文明に伴って海上と陸地という2本のシルクロードを通して早くもアジア各国に、伝わっていきました。これは、我々中国が世界医療衛生事業に尽くした大きな貢献です。

今日の世界医療衛生事業は、新しいチャレンジに直面しています。このチャレンジは、医学目的の調整と医学モードの転換に現れています。現代医学は、疾病を対象とし、病因の除去、病理の矯正、病巣の切除を目的とする治療となっており、こうした認識観は医療と社会の実践の中に益々その不十分な所と限局性が現れ、人々の深い反省を呼んでおり、それにより医学目的の調整と医学モードの転換と言う論議を引き起こしました。現在、元来の疾病に対抗することを目的とする医学から、健康維持、健康増進、疾病の予防、人間の自己健康能力を発揮させる事を目的とする医学へ、徐々に転換し、疾病を除去する事を目的とする生物医学も、生物—社会—心理—環境と言う医学モードへ転換しつつあります。

中国医薬学は、中華民族が長期に亘って、人体の健康を模索している過程で、累積してきた医学文化の至宝であり、その源は遠く、歴史は長く、内容は広くて奥深いものです。此处数十年来、国内外の現代医学と科学技術の発展に伴い、中医薬学の科学価値と臨床価値が、益々世界の人々の注目を集めています。人体は1つで全体であると言う考え方、弁証論治、総合調整と言う理念は、現代主流医学に日増しに浸透し、深い影響が生まれています。多くの国々は、中医薬を自分の国の代替医療、或いは、補助医学の一つとしています。中医薬学は、世界に進出し、現代医学と互いに長所を取り入れ、短所を補い、人類の共通の健康問題を解決する為に、共に発展させる時代が、既に到来していると思われます。

中日両国医学文化交流は、源は遠く、歴史は長いです。1500年前に、既に、中国の灸治療術等、中医薬の技術は、唐代の中国文化と共に、日本に渡りました。明治維新迄は、「漢方医学」は、日本の国医として、日本国民の健康の為に重要な貢献をしました。それと同時に、中日両国民を

連携する重要な文化の絆ともなりました。今日に至って、中日両国医学発展の社会文化環境に、大きな変化が起こり、両国伝統医学発展の軌跡は異なりますが、両者の間を連携する「架け橋」が、築かれていて、つまり、中医薬文化の生命力は留まる処を知りません。中医薬の古方方剤の開発・研究、及び製薬技術に対する日本の研究は、我々に多くの重要なヒントを与えてくれましたが、中医薬基礎理論、及び中薬の現代薬理に対する中国の研究は、日本国民の中医薬の科学技術と中医薬文化を勉強、理解するために手がかりを提供しました。

「長風破波会有期、直掛雲帆濟滄海」(大業を成す時が到来すれば、直ぐ帆を揚げて、大海原へ漕ぎだそう。)

中日両国の医学文化交流は、責任が重く、道程は未だ遠いと思います。私は、この『中医国際教育教科書シリーズ』の出版は、両国の医学と文化の交流に、新たな貢献が出来、新しい医学の「シルクロード」になれる事と確信しております。

上海中医薬大学

学長 陳凱先

2009年4月 上海にて

編著者の説明

はじめに、この本の編纂意図を記しておきます。

【1】出版の背景

中国医学と日本の東洋医学の理論体系は、共通する所もあり、また違う所もあります。中国医学と日本漢方では、用語が異なっており、文字が同じでも意味が違うこともあります。日本漢方でも流派によっては、必ずしも用語の意味とか内容が同じでないという、困った状況にあるのです。

ここ数年来、中国医学や中医薬学が世界への進出を加速しつつあり、日本に於ける「中医学」の普及ぶりもめざましく、中日医学関係者の往来と交流は、内容の濃いものになってきており、増えつつある出版物と相まって、中医学の用語や概念は中日間では、ほぼ同じになり、考え方も本格化して、伝統医学に関する共通の言葉が増加して来ました。

世界で、中医学の普及活動を推進する為、教育を行うことは大切な事です。そこで中医学を体系化した学問として、教育するための教科書を作る必要があるのです。上海中医薬大学は、WHOの指定している伝統医学合作センターとなっており、毎年多くの諸外国の方々の中医研修教育を実施しています。こうした背景を踏まえながら、上海中医薬大学・国際教育学院日本部の指導教師と、日本の中医事業に携わっている医者の方々との共同で『中医国際教育教科書シリーズ』（日本語版）の制作にあたっています。この教科書シリーズは、現段階では、「中医基礎理論」、「中医診断学」、「中薬学」、「方剂学」、「中医内科学」を発行しており、更にこれからも編纂を続けていきます。

【2】企画目的

この教科書シリーズは、中医学の全体像を体系的に示すと共に、基本理論や用語そして概念を明確に定義して、広く中医学を普及させ、本格的に且つ系統的に中医学を学ぼうとする日本人の為に、正確に弁証（診断）のできる日本人中医師を育成する目的で企画されたものです。

【3】この教科書の位置付け

この教科書シリーズでは、出来るだけ日本人が中医学を学ぶ立場に立って平易な文章を心が

け、概念の解釈が正確に出来るように、表現が明晰であり、内容が判り易く、理解し易いという実用的な中医国際教育教科書シリーズを目指して編纂したものです。

【4】編纂時の配慮

(1) 出来るだけ判り易い文章にしました。特に症状に就いては、最も近い日本の用語に書き換えています。しかし中医用語とも対照出来る事が望ましいので、日本語と表現が大きく異なる用語は、その言葉のすぐ後の()の中に注記しています。

(2) 中医専門用語は、出来るだけそのまま用いていますが、理解し難い処は、用語の後の()に補足説明しました。中医学の術語は、中国で使っているものを、出来るだけそのまま用いています。しかし、その中の難解な用語については、文章の最初に出て来た時に、その用語の後に意味を解釈しています。

(3) 中医専門用語は、本文の何処かに定義されていますので、各教科書の巻末に「索引」を設け、日本語の読み方も付けて、検索し易くしています。

(4) 『中薬学』の巻末に中薬の「検索」を、『中医内科学』の巻末に方剤の「検索」を設けて、日本語の読み方も付けています。

これらはすべて、今後の『中医学』の勉強に便宜を図るためのものです。

目 次

緒 論

1

一、中医学の理論体系の形成と発展	1	7. 防治原則	5
二、中医学基礎の概要	3	三、中医学の基本的特徴	5
1. 陰陽・五行学説	4	1. 統一体観	5
2. 気・血・津液	4	(1) 人体は1つ有機的統一体である	5
3. 蔵象学説	4	(2) 人と自然の統一性(天人相応)	6
4. 経絡学説	4	2. 弁証論治	8
5. 病因と発病	4	(1) 弁証	8
6. 病機	5	(2) 論治	9

第一章 陰 陽 五 行

11

第一節 陰陽学説	11	3. 病理変化の説明	17
一、陰陽学説の基本的観点	11	4. 診断への応用	18
1. 事物の属性としての陰陽	12	5. 治療への応用	18
2. 陰陽可分	13	6. 薬物の性味と作用における陰陽	19
3. 陰陽の互根互用	13	第二節 五行学説	20
4. 陰陽の制約	14	一、五行学説の基本的内容	20
5. 陰陽の消長	15	1. 五行の特性と分類	20
6. 陰陽の転化	16	2. 五行の相生と相克	21
二、中医学における陰陽学説の応用	17	3. 五行の相乗と相侮	23
1. 組織構造の説明	17	二、中医学における五行学説の応用	24
2. 生理機能の説明	17	1. 五行の特性にもとづいた五臓系統の	

生理機能と相互関係	24	(1) 相生関係による伝変	26
2. 五臓間の相互関係	25	(2) 相克関係による伝変	27
(1) 五臓の相互資生関係	25	4. 診断への応用	27
(2) 五臓の相互抑制関係	26	5. 治療への応用	28
3. 臓腑間の病理的影響についての		(1) 相生法則による治療原則	28
説明	26	(2) 相克法則による治療原則	29

第二章 気、血、津液

31

第一節 気	31	3. 血の作用	38
1. 気概念	31	4. 血の循環	39
2. 気の生成	32	5. 気と血の関係	39
3. 気の種類	32	(1) 血に対する気的作用	40
(1) 元気	32	(2) 気に対する血的作用	41
(2) 宗気	33	第三節 津液	41
(3) 営気	33	1. 津液概念	41
(4) 衛気	34	2. 津液の生成、輸布及び排泄	41
4. 気的作用	35	3. 津液的作用	42
(1) 推進作用	35	(1) 滋潤と滋養作用	42
(2) 温煦作用	35	(2) 血液の化成	43
(3) 防御作用	35	(3) 老廃物の運輸	43
(4) 固摂作用	36	4. 津液の分類	43
(5) 気化作用	36	5. 気と津液の関係	44
5. 気の運行	37	(1) 津液に対する気的作用	44
第二節 血	37	(2) 気に対する津液的作用	45
1. 血概念	37	6. 津液と血の関係	45
2. 血の生成	38		

第三章 蔵 象

47

蔵象概説	47	一、臓、腑、奇恒の腑のそれぞれの
------------	----	------------------

生理的特徴	47	(5) 心と腎	57
二、藏象学説の形成	48	付：心包	57
(1) 古代の解剖知識	48	二、肺	58
(2) 人体の生理、病理現象の観察	48	1. 肺の生理機能	58
(3) 長期にわたる医療実践	48	(1) 気を主り、呼吸を司る	58
三、整体観	48	(2) 宣発と肅降を主る	59
(1) 臓腑は1つの整体である	48	(3) 水道通調の作用	59
(2) 五臓が経絡を通じて、五体及び 五官に連係しており、1つの整体 を形成している	49	(4) 百脈に朝じ、治節を司る	60
四、精神、情緒と五臓との関係	49	2. 五志、五液、五体、五華、五竅との 生理的連係	60
五、五臓の生理機能バランス	49	(1) 憂は肺の志	60
六、藏象学説中の臓腑の位置付け	49	(2) 涕は肺の液	61
七、藏象学説の内容	50	(3) 体は皮に合し、華は毛にある	61
第一節 五臓	50	(4) 鼻に開竅する	61
一、心	51	3. 肺と他臓腑との関係	61
1. 心の生理機能	51	(1) 肺と大腸	61
(1) 血脈を主る(血の管理と服の 管理)	51	(2) 肺と脾	62
(2) 神志を主る	51	(3) 肺と腎	63
2. 五志、五液、五体、五華、五竅との 生理的連係	52	三、脾	64
(1) 喜は心の志	52	1. 脾の生理機能	64
(2) 汗は心の液	53	(1) 運化を主る	64
(3) 体は脈に合し、華は顔面 にある	53	(2) 昇清を主る	65
(4) 舌に開竅する	53	(3) 統血を主る	65
3. 心気、心血、心陰、心陽	54	2. 五志、五液、五体、五華、五竅との 生理的連係	66
4. 心と他臓腑との関係	54	(1) 思は脾の志	66
(1) 心と小腸	54	(2) 涎は脾の液	66
(2) 心と肝	55	(3) 体は筋肉に合し、四肢を主る	66
(3) 心と脾	55	(4) 口に開竅、華は唇にある	66
(4) 心と肺	56	3. 脾と他臓腑との関係	67
		(1) 脾と胃	67
		(2) 脾と腎	68
		四、肝	69

1. 肝の生理機能	69	(2) 腎と心、腎と肺、腎と脾、腎と肝	81
(1) 疏泄を主る	69	付：命門	81
(2) 蔵血を主る	71	第二節 六腑	82
2. 五志、五液、五体、五華、五竅との生理的連係	71	一、胆	82
(1) 怒は肝の志	71	(1) 胆汁の貯蔵と排泄	82
(2) 涙は肝の液	72	(2) 決断を主る	83
(3) 体は筋に合し、華は爪にある	72	(3) 奇恒の腑に属する	83
(4) 目に開竅する	72	二、胃	83
3. 肝気、肝陽、肝血、肝陰	73	(1) 水穀の受納、腐熟を主る	83
4. 肝と他臓腑との関係	73	(2) 胃は通降を主る、降を以て和とする	84
(1) 肝と胆	73	三、小腸	84
(2) 肝と肺	73	(1) 小腸の受盛、化物	84
(3) 肝と脾	74	(2) 泌別清濁	84
(4) 肝と腎	75	四、大腸	85
五、腎	76	五、膀胱	85
1. 腎の生理機能	76	六、三焦	86
(1) 蔵精、生長、發育、生殖を主る	76	1. 三焦の生理機能	86
(2) 水を主る	77	(1) 諸気を主宰し、全身の気機と氣化作用を統轄する	86
(3) 納気を主る	77	(2) 水液運行の通路である	86
2. 五志、五液、五体、五華、五竅との生理的連係	78	2. 三焦の区分と各部の機能特性	87
(1) 恐は腎の志	78	(1) 上焦	87
(2) 唾は腎の液	78	(2) 中焦	87
(3) 体は骨に合し、骨を主り髓を生じ、華は髪にある	78	(3) 下焦	87
(4) 耳及び前後二陰に開竅する	79	第三節 奇恒の腑	88
3. 腎陰、腎陽は各臓の陰陽の根本である	79	一、脳	88
4. 腎陰と腎陽の関係	80	二、女子胞	89
5. 腎と他臓腑との関係	81	(1) 腎中の精氣——天癸の作用	90
(1) 腎と膀胱	81	(2) 衝脈・任脈の作用	90
		(3) 心・肝・脾の作用	90

第四章 経 絡

92

第一節 経絡の概念と経絡系統の内容..... 92

1. 経絡の概念 92
2. 経絡系統の構成..... 92
 - (1) 経脈 92
 - (2) 絡脈 93

第二節 経絡の基本機能及びその臨床

応用 95

1. 経絡の基本機能..... 95
 - (1) 組織器官を連絡し、表裏上下をつ
なぐ 95
 - (2) 気血の運行、陰陽の調和 96
 - (3) 外邪の侵入に対する防御 96
 - (4) 病邪の通路、病状を反映 96
 - (5) 針灸の刺激を伝導、臓腑の
虚実を調整 97
2. 経絡の臨床応用..... 97
 - (1) 診断面 97
 - (2) 治療面 97

第三節 経絡の循行分布法則..... 98

一、十二経脈 98

1. 十二経脈の分布法則 98
2. 十二経脈の循行..... 99
 - (1) 手太陰肺経 99
 - (2) 手陽明大腸経 99
 - (3) 足陽明胃経 100
 - (4) 足太陰脾経 101
 - (5) 手少陰心経 102
 - (6) 手太陽小腸経 103
 - (7) 足太陽膀胱経 103

(8) 足少陰腎経 104

(9) 手厥陰心包経 105

(10) 手少陽三焦経 106

(11) 足少陽胆経 108

(12) 足厥陰肝経 109

3. 十二経脈の表裏関係..... 109

4. 十二経脈の走行及び接続の
規則性 110

5. 十二経脈の流注順序..... 111

6. 十二経脈の同気相通..... 112

7. 十二経脈の気血の量..... 112

8. 十二経脈の標本、根結、気街、
四海 113

(1) 標本 113

(2) 根結 113

(3) 気街 114

(4) 四海 115

付録 116

(一) 十二経別 116

1. 十二経別の循行、分布状況 116

2. 十二経別の働き 117

(1) 表裏関係にある2 経及び内臓間
の関係を強化する 117(2) 十二経脈の循行の不足を補って
いる 117

(3) 十二経脈の治療範囲を広げる 117

(二) 十二経筋 118

1. 十二経筋の循行、分布状況 118

2. 十二経筋の働き 119

(三) 十二皮部	119	(2) 十二経脈中の気血を調節する	126
二、奇経八脈	119	(3) 補完、統率、コントロール作用	126
1. 奇経八脈の循行とその作用	120	三、十五絡脈とその他の絡脈	127
(1) 督脈	120	1. 十五絡脈の循行とその作用	127
(2) 任脈	121	2. 十五絡脈の総合作用	128
(3) 衝脈	122	(1) 十二経脈の表裏をなしている2経	
(4) 帶脈	123	の間の連係を強化する	128
(5) 陰蹻脈、陽蹻脈	123	(2) 他の絡脈に対し統率作用をもち、	
(6) 陰維脈、陽維脈	123	人体の前後及び側面の連係を強化	
2. 奇経八脈の総合作用	124	する	128
(1) 十二経脈の連絡と疏通の強化	125		

第五章 病因と発病

129

第一節 病因	129	(3) 湿の性は粘滞	135
一、六淫	130	(4) 下降しやすく、下部を侵入しや	
1. 風	131	すい	135
(1) 風は陽邪、その性は開泄、上部や肌		5. 燥	135
表を侵入しやすい	131	(1) その性は乾燥、津液を損傷しや	
(2) 風はよくめぐり、変化が速い	132	すい	135
(3) 風は百病の長	132	(2) 肺を損傷しやすい	135
2. 寒	132	6. 火(熱)	136
(1) 寒は陰邪、陽気を損傷しやすい	133	(1) 火熱は陽邪、その性は炎上	136
(2) 寒の性は凝滞	133	(2) 気、津を損傷しやすい	136
(3) 寒の性は収引	133	(3) 風を生じ、動血しやすい	136
3. 暑	133	(4) 腫瘍の形成	137
(1) 暑は陽邪、その性は炎熱	134	二、瘴氣	137
(2) その性は昇散、気、津を損傷し		三、七情	138
やすい	134	1. 内臓気血と七情の関係	138
(3) 湿邪を伴いやすい	134	2. 七情による発病の特徴	139
4. 湿	134	(1) 内臓を直接損傷する	139
(1) 湿は陰邪、気機を阻害しやすく		(2) 臓腑の気機に影響する	139
脾胃の陽気を損傷しやすい	134	(3) 情志の不安定な起伏変化は病状	
(2) 湿の性は重濁	134	の悪化を加速する	140

四、飲食と労逸	141
1. 飲食不節	141
(1) 餓飽失常	141
(2) 飲食不潔	142
(3) 偏食	142
2. 労逸	143
(1) 労倦(疲労)	143
(2) 過度の安逸	143
五、外傷	143
(1) 打撲、捻挫、刀傷	143
(2) 火傷	144
(3) 凍傷	144
(4) 虫獣傷	144
六、痰飲と瘀血	144
1. 痰飲	144
(1) 痰飲の基本概念	144
(2) 痰飲の形成	145
(3) 痰飲による発病の特徴	145

2. 瘀血	146
(1) 瘀血の基本概念	146
(2) 瘀血の形成	146
(3) 瘀血による発病の特徴	147
(4) 瘀血の部位別による症状	147
第二節 発病	148
1. 邪正と発病	148
(1) 正気不足は、疾病発生の内在原因	148
(2) 邪気は発病の重要な条件	148
(3) 正邪闘争の勝負により、発病するかしないかを決定する	148
(4) 発病した後、正気の強さと病邪の性質、軽重、部位によって異なる証候が現れる	149
2. 内外環境と発病	149
(1) 外の環境と発病	149
(2) 内在環境と発病	150

第六章 病 機

152

一、邪正虚実病機	152
邪正の盛衰	152
(1) 邪正の盛衰と証の虚実	152
(2) 邪正の盛衰と病の転帰	154
二、陰陽寒熱病機	155
陰陽失調	155
(1) 陰陽の偏勝	156
(2) 陰陽の偏衰	157
(3) 陰陽互損	159
(4) 陰陽格拒	159
(5) 陰陽亡失	160
三、気血津液病機	160
1. 気病の病機	161

(1) 気の機能減退	161
(2) 気の運行の失調	162
2. 血病の病機	163
(1) 血虚	163
(2) 血熱	164
(3) 血溢	165
(4) 血瘀	165
3. 気と血の互根互用の機能失調	166
(1) 気滞血瘀	166
(2) 気不摂血	167
(3) 気随血脱	167
(4) 気血両虚	167
(5) 気血不養経脈	167

4. 津液の病機.....	167	2. 胃病の病機.....	186
(1) 津液不足	168	(1) 胃気虚寒	186
(2) 津液の輸布、排泄障害	168	(2) 胃陰不足	186
5. 津液と気血の機能失調	169	(3) 胃火上炎	187
(1) 津停気滯	170	(4) 胃絡瘀滯	187
(2) 気随液脱	170	3. 小腸病の病機	187
(3) 津枯血燥	170	(1) 小腸虚寒	187
(4) 津虧血瘀	170	(2) 小腸実熱	188
四、経絡病機	170	4. 大腸の病機.....	188
1. 経絡気血の盛衰	171	5. 膀胱の病機.....	188
(1) 経絡気血の偏盛	171	6. 三焦の病機.....	189
(2) 経絡気血の偏衰	171	(三) 奇恒の腑の病機	190
2. 経絡気血の運行失調.....	171	1. 脳病の病機.....	190
(1) 経絡気血の運行障害.....	171	2. 髓病と骨病の病機	190
(2) 経絡気血の運行の逆乱	171	3. 脈病の病機.....	191
3. 経絡気血の衰竭	172	4. 女子胞病の病機	191
五、臓腑病機	172	(1) 気血不和による胞宮の機能 失調	191
(一) 五臓の病機	173	(2) 心、肝、脾、腎と胞宮の機能失調.....	191
1. 心病の病機.....	173	(3) 衝脈と任脈の気血不足による胞 宮の機能失調	191
(1) 心陽と心気の機能失調	173	付：内生の五邪	192
(2) 心陰と心血の機能失調	174	1. 内風	192
2. 肺病の病機.....	175	(1) 肝陽化風	192
(1) 肺気失調	176	(2) 熱極生風	193
(2) 肺陰失調	177	(3) 陰虚風動	193
3. 脾病の病機.....	177	(4) 血虚生風	193
(1) 脾陽、脾気の失調	178	(5) 血燥生風	193
(2) 脾陰の失調	179	2. 内寒	193
4. 肝病の病機.....	179	(1) 陽虚陰盛による虚寒内生	193
(1) 肝気肝陽の亢進	180	(2) 陽気虚衰による気化機能失調	194
(2) 肝血肝陰の虚損	180	3. 内湿	194
5. 腎病の病機.....	181	4. 内燥	195
(1) 腎精腎気の不足	182	5. 内火、内熱	195
(2) 腎陰腎陽の失調	183	(1) 陽盛化火	195
(二) 六腑の病機	185		
1. 胆病の病機.....	185		

(2) 邪鬱化火	196
(3) 五志化火	196

(4) 陰虛火旺	196
----------------	-----

第七章 予防と治療の原則

197

第一節 予防原則 197

1. 未病を先に防ぐ(未病先防)..... 197

(1) 正気を養い、体質を強め、疾病に対
する抵抗力を高める..... 198

(2) 病邪を撲滅し邪気の侵入を防止
する 199

2. 疾病の進行を防ぐ 200

(1) 早期診断と早期治療..... 200

(2) 病気の伝変法則により、続発する
可能性がある病気の発生を予防
する 200

第二節 治療原則 201

一、治病求本(病を治するにはその本を 求める) 201

1. 正治と反治..... 202

(1) 正治 202

(2) 反治 203

2. 標治と本治..... 204

(1) 急則治其標 204

(2) 緩則治其本 204

(3) 標本兼治 205

二、扶正祛邪(正気を助け、邪気を取り 除く)..... 205

1. 扶正と祛邪の概念と関係 205

2. 扶正祛邪の応用原則..... 206

(1) 扶正 206

(2) 祛邪 206

(3) 扶正と祛邪の併用..... 206

3. 扶正と祛邪の使用前後 207

(1) 先祛邪後扶正(祛邪した後は扶正
する)..... 207

(2) 先扶正後祛邪(扶正した後は祛邪
する)..... 207

三、陰陽の調整..... 207

1. 損其偏盛(偏盛を追い出す)..... 207

2. 補其偏衰(偏衰を補う) 208

四、臟腑機能の調整 208

五、気血津液の関係の調整 209

六、因時、因地、因人制宜(季節、地理 環境、個人差により適切に治療 する)..... 210

1. 因時制宜(季節により、適切に治療
する)..... 210

2. 因地制宜(地理環境により、適切に
治療する) 211

3. 因人制宜(人により、適切に治療
する)..... 211

(1) 年齢 211

(2) 性別 211

(3) 体質 212

用語索引

213